

---

# 過去の清算はきちんと済ませましょう

金枝 那里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去の清算はきちんと済ませましょう

### 【Nコード】

N25910

### 【作者名】

金枝 那里

### 【あらすじ】

ハロウィンの日、ファリカと二人で手作りのパンプキンパイを食べる。毎年の恒例となったこの習慣を、レティは楽しみにしながら準備をしていた。

しかし、いつもどおりパイを焼き、ファリカを待つレティの元へ、予想外の人物が訪れる。目的の読めぬレイザートの来訪に、レティは戸惑いつつ対応する。混乱する周りの隙をついて、レイザートはレティの耳元で意味深に囁いた。その言葉にレティは脅されて強引に結婚を迫られる話ですが、主人公はいい年なので恋

愛成分は薄めです。

テスト投稿を兼ねています。お暇つぶしにどうぞ。

## (前書き)

### 登場人物紹介

大まかな人物紹介です。読まなくても特に差し支えありません。

### 【レティ】

25歳

主人公 レティリー・イツール・ミーフォルン  
フアリカの元家庭教師

### 【フアリカ】

16歳

お嬢様 フアリカ・エルルス・ネフォシア  
レティの元生徒  
レティ大好き  
侯爵家の一人娘

### 【ソイト】

18歳

執事 ソイトレッド・トークウイン  
フアリカの執事  
レティとは付き合いがそこそこ長い

### 【レイザート】

25歳

フアリカの元婚約者 レイザート・ダラルブルーク・シュラルフィン  
伯爵家長男  
現在、20歳の次男が家を継いでいる

【アルイリラ】

20歳

メイド

「trick or treat?」

勢いよく扉が開く。耳慣れた声にレティは微笑を浮かべて振り向いた。

「用意してあるよ。ほら、これだろう?」

レティは机の隅に置いてあるかごを差し出した。つんと甘い香りが漂う。

「ええ。レティのパンプキンパイは毎年楽しみにしておりますのよ」

「うれしいね。ここで食べていくかい? 紅茶でも淹れようか」

「ええ、そうですね」

「トリックオアトリート?」

レティが言葉を終える前に、高らかな宣言が響き渡る。声のするほうへ目を向ければ、情けない顔をして部屋に飛び込んできたソイトがいた。

「あらソイト。何の用ですか?」

「だから、トリックオアトリート、ですっ! 僕もレティのパンプキンパイが食べたいんですよ」

「まあ、ずうずうしい。だから毎年撒いてきたというのに空気の読めない執事ですこと」

「……っ、酷いですお嬢様! ね、レティ、酷くない?」

「(知らないわよ) 突然言われても、パイは一人分しか焼いてないのだけだ」

「諦めなさい」

「そんな、酷いお嬢様あ!」

いい年して泣き喚くソイトにファリカは冷たい視線を送る。レティの手作りパイを口にしようなんて十年早い。

「マスター」

ふっとアルイリラが姿を現す。決して存在感がないわけではない

のだが、気配を消すのは一流だった。だがレティは動じずに（いつものことだ）アルイリラを見遣る。

「どうかした？」

「レイザート様がお見えです」

そう言つてアルイリラは扉を開く。既に部屋の前まで通していたのか、レイザートが立っていた。

「ご機嫌麗しゅう、レティ、ファリカ嬢」

レイザートは優雅な仕草で礼をとった。

「ええ。レイザート様もご機嫌麗しゅう」

ファリカも挨拶をする。慣れた仕草で手のひらを差し出すと、レイザートは手の甲に口付けを落とす。

儀式が終わるのを見届けて、レティは口を開く。

「こんなところによくこそいらつしゃいました、シユラルフィン伯爵。今日はどのようなご用件で？」

「ええ。ところで、随分いい匂いがしますね」

「（早く用件を言え）パンプキンパイを焼いたものですか。ハロウインのお菓子ですよ」

「ああ、それはいいですね      t r i c k   o r   t r e a t ?

私もただだけませんか」

「（……図々しいつていうか菓子貰う歳じゃないだろう）まあ、レイザート様だったら。冗談はよしてください」

レティは困つたように笑いながら言った。もちろん、心の中では口汚く罵るのは忘れないが。

レティはシェフではない。そんな人間が作ったものを、伯爵ともあろう身分の人間に差し出すなど、失礼も良いところだ。それにそもそも、ハロウインは子どもの行事だ。大人になって、お菓子を要求するのは通常ではありえない。

「ああ、失礼。さすがに私の分のお菓子まではありませんよね？」

「（当たり前だ）ええ、申し訳ありません。代わりと言つてはなんですが、先日いただいた美味しいお菓子を      」

「いいえ、とんでもない。突然お邪魔したのはこちらですからね。美味しそうな匂いで非常に残念ですが」

お茶菓子をと提案するレティを、レイザートは遮った。あくまでパイに拘る様子を見せるレイザートに、レティは呆れた。レイザートは女性の扱いに慣れてるようだから、こういうった場面でも女性に関心を示す態度を忘れないのだろう。

「残念ですが……。来年は余分に用意いたしますので」  
軟派な物言いに嫌悪を感じつつも、レティは微笑を浮かべつつ社交辞令を述べた。

「ええ、楽しみにしています。では今年は”trick”で我慢することにします」

「……、は？」

言う間にレティは壁に追い詰められる。

「ちよっ……」

レイザートの唇がレティと重なる。目を見開いて硬直するレティに、レイザートは更に深く口付ける。

「そこまですわ」

「レイザート様！」

首もとのリボンにまで手をかけようとするレイザートの両肩を、ファリカとソイトが掴む。ファリカの顔には笑顔が張り付いていたが、その表情が強張っていることは誰の目にも明らかだ。

一方、ソイトは顔面蒼白でまるで怯える白兔のようだ。もちろん、震えているのは怯えているわけではない。

レティはそんな二人のあまりにも分かりやすい反応に思わず微笑んだ。

「よくもまあ、人前でこんなことが出来ますね。冗談とはいえ、やりすぎですよ」

「確かに。すっかりお二人のことを忘れていましたよ」

レイザートは悪びれた様子もない。レティは呆れたため息をつく。身分としては申し分ないが、ファリカがレイザートを振ったのは結

果的に正しかったのだらうとレティは思う。こんな人間に嫁ぐことになれば、ファリカは毎日涙で枕を濡らすことになる。

「な、レイザート様！」

声を上げるソイトを抑えて、ファリカが前に出る。

「それは思い出してくださって大変結構ですわ。思い出していただけたところで、即刻お帰りいただけます？」

「それは貴女が決めることではないでしょうか？　ところで、レティ。続きをしましょうか。人前でなければいいのでしょうか？」

「それは揚げ足取りですわ！」

ファリカは悲鳴を上げる。こういった素直な反応を示す娘は、レイザートの好みだらう。ますますエスカレートしそうな雰囲気、レティは口を開く。

「いくらハロウィンと言えど、冗談が過ぎますよ、シュラルフィン伯爵。ファリカをからかって楽しむにも、度が過ぎます」

「か、からかう？」

目を白黒させるファリカに、レティは後悔する。この反応こそ、レイザートの好むところだ。これで頬を染めていれば、完璧だ。レイザートがファリカを煽るのを予想して、レティは頭が痛くなる。だが、レイザートの答えはレティの予想していたものとは異なつた。「からかっているつもりも、冗談のつもりもありませんよ。ねえ、レティ？」

否定の文句は想像していたが、レティに同意を求めるとは思いもよらなかつた。レティは言葉を失い、すぐに反応できなかつた。レティのその様に微笑を浮かべつつ、レイザートは口を耳元に寄せて囁いた。

「いつまで、私をシュラルフィン伯爵とお呼びになるのですか、レティリー・イツール・ミーフォルン？」

レティは息を呑んだ。

「どこから……？」

その名を知つた、と訊ねるレティの声は掠れていた。

「それを答えるのはかまいませんが。貴女はよろしいのです？」

レイザートがさりげなく視線を向ける先に、レティは気づく。予想外の事態に、ファリカとソイトの存在を忘れていた。

「レティ？」

心配げに見つめてくるファリカに、レティの胸は痛む。しかし、今はレイザートを詰問する必要があった。ファリカとソイトに知られるようなことはあつてはならない。

もちろん、知られたからと言って、今までの関係が劇的に変わることはないだろうとレティは信じている。彼らがレティに不利益な情報を、わざわざ吹聴することはないし、望めば変わらぬ関係を続けてくれるだろう。それでも、今までずっと騙っていたのだ。今のレティと接してくれている彼らに、いたずらに混乱の種を蒔くのは避けるべきだ。

「つまり、『いたずら』のつもりだと？」

舌を湿らせてから、レティは答える。眉を寄せるレイザートに小声で「話を合わせて」と頼むと、レイザートはすぐに頷いてレティから離れる。

「ええ。とても楽しい”trick”でしたよ」

「な……、いたずらで済むと……」

「気は済んだのでしたら、もうお帰りいただいた方がよろしいでしょう。アルイリラ、ご案内差し上げて」

怒りの冷めやらぬファリカを遮って、レティは声を上げる。何か言いたそうにレティを見やるレイザートだが、アルイリラが耳元で囁くと、納得したように頷いた。

「では、私はこれで。あまりの楽しさに、少し我を忘れてしまいました。お騒がせいたしました、大変申し訳ない」

「……いいえ、こちらこそ。頭に血が上っております。失礼な言動、お許しくださいませ」

謝られてなおも喧嘩を売るのは得策ではない。納得はしていないものの、ファリカはレイザートに礼をとった。無論、心の中では「

二度とレティに近づくな」と毒づいてはいるが。

実際、アルイリラとレイザートが去っていくのを見届けて、耐え切れないとも言おうようにファリカは口を開いた。

「なんなんですよ、あれは！」

「そうですね、いくら身分が違うとはいえ、レティも甘すぎるよ」

同調するソイトに、更にファリカは言い募る。

「そうですね！　なんでしたら、ネフォシアの権限で貶めてやることもできますのよ？　わたくしの臣下に不逞をはたらくのは、重罪ですことよ」

「気持ち嬉しいけどね。私は既にファリカの家庭教師を降りたし、そこまで大事じゃない」

「大事ですわ！　わたくしのレティに触れるのみならず口付けなど

……！　身分を弁えなさい！」

「いや、自分を弁えなさいって、お嬢様。レイザート様はもう居らっしゃらないですから」

「居ないからこそ言えるのですわ。全く、あの年中発情期が！　過激になるファリカの言葉に、ソイトとレティは苦笑する。

「でも、レティも平手打ちくらいすればよかったのに」

その程度ならファリカの権力でもみ消せるし、レイザートとて問題にすることもないだろう。レティは、仮にもファリカの元家庭教師だったのだ。裏でこっそりというならともかく、ファリカの目の前で無理矢理唇を奪うのは、糾弾されて当然の行為だ。

「口付け程度で大騒ぎする歳でもないだろう？　シユラルフィン伯にとつては挨拶程度のものだろうし、腹を立てるだけ損さ」

「まあ、レティが良いなら何も言わないけどね」

物言いたげにレティを見つめるものの、ソイトは何も言わなかった。

爵位のない人間が、伯爵に逆らうことは望ましくない。ソイト個人は文句のひとつも言うべきだと思っているが、レティが気にしないと言うのなら、わざわざ喧嘩を売ることもない。ソイトは爵位の

ない身分だ。レティの立場をよく知っているからこそ、口を嚙むレティの選択も理解できなくなかった。

だが、侯爵令嬢であるファリカには、レイザートも、何も言わないレティの振る舞いも理解できなかった。

「いいえ、たとえレティが許してもわたくしは許しませんことよ！  
二度とレティの家の敷居はまたがせませんわ」

「お嬢様……」

当のレティを置き去りに、怒りを白熱させるファリカに、ソイトは呆れ気味にため息をつく。

「ファリカが怒ってくれたのだから、私はもう気にしてないよ。それよりも、パイが冷めないうちに持ってお帰り」

「ああ、そうでしたわ。せっかくのレティのパンプキンパイ、まだ冷めてないかしら」

「大丈夫ですよ、お嬢様。まだ暖かいです」

ソイトがパイの入っている籠に手を触れた。

「ええ。ではいつものように一緒に食べましょう、レティ。紅茶をいただける？」

いつもは、二人でパンプキンパイをお茶菓子に、お茶会を開くのが恒例なのだ。気を取り直して、ファリカはレティへと視線を向けた。

しかし、パイの入った籠をソイトに差し出し、レティは困ったように笑いかけた。

「悪いね、今年は急な仕事が入ったんだ。パイだけで勘弁してくれ」

「まあ、なんてこと！ ソイトに邪魔はされる、レイザートには気分が悪い、おまけに仕事にレティを取られるなんて！」

「え、僕もですか」

レティからパイを受け取りながら、ソイトは目を丸くしてファリカを振り返った。しかし、ファリカの目はソイトを映していなかった。怒りが再熱したのか、主にレイザートへの悪口を呟いていた。

その様は今にも丑の刻参りにでも出かけそうで、ソイトは背筋を凍

らせた。自分に向けられた悪意ではないと言うのに。

「また暇が出来れば遊びにおいで。今度はゆつくりお喋りをしよう」  
「む、お父様がなかなかお許しくださらないのよ」

レティの言葉に、我に返ってファリカは頬を膨らませた。

「お嬢様が真面目にお見合いをなさらないからですよ」

「うるさくてよ、ソイト！ ですが、あまり駄々をこねてもいけませんわね。今日はこれで失礼することにいたしますわ」

「ああ。次を楽しみにしているよ」

「ええ、レティ。御機嫌よう」

アルイリラに案内され、ファリカ達は退出した。その後姿を眺めつつ、レティはぼんやりと扉の先を眺めた。

ファリカの姿が見えなくなるのを見送って、レティは深く息をつく。まだ、気の重い残件がある。重い腰を上げ、書斎の前に立つ。

二度ノックをすると、中から応じる声が聞こえた。主である自分が入室のお伺いを立てるなど滑稽なことだと苦笑して、レティは扉を開いた。

「お待ちしておりましたよ、レティ。ファリカ嬢を宥めるのは大変でしたか」

書斎に立つのはレイザート。アルイリラに指示し、帰ると見せかけて書斎に案内させていたのだ。

「ええ。それより、先ほどの続きと参りましょうか」

答えるレティに、レイザートは目を見張る。

「貴女からそのようなご要望をいただくとは思いませんでしたよ」

その言葉に不審に思う。自分からレティの素性の話を持ちかけて、こちらから振るのを意外に思うとは。だが、訊ねるのも億劫だった。「寝台もあることですし、たっぷり可愛がって差し上げますよ」

近づくレイザートをさりげなくかわして、レティはため息をつく。わざとだか知らないが、随分と都合の良い解釈をする。

「先ほどの続きというのは、私の名前のことですよ。どこからその名を知りました？」

「ああ、残念。やっと私の想いが通じたのかと喜んだのですが」

「（やっぱりわざと都合よく解釈したな）どこから私の名を？」

質問に答えないレイザートに苛立って、レティは繰り返す。ただでさえ弱みを握られているのは気分が悪い。

「……覚えていないのですか？」

「何を」

レティの言葉に、レイザートは少し考え込む。レティの反応は意外だったようだ。しかし、レティには何の覚えもない。

「レイザート・ダラルブルーク・シユラルフィン、この名に覚えは？」

「シユラルフィン伯爵家の長子。年齢25歳、女好きで独身、泣かせた女性は数知れず、つい先月フリカとの婚約が持ち上がるも破棄される」

「そういうことではなくてですね……」

「シユラルフィンの家系の話ですか？」

確かレイザートが長男で、下に20歳の弟がいたはず。弟は幼馴染の伯爵家の娘と結婚して 記憶をたどるレティを、レイザートは遮った。

「そういう話でもありません。本当に覚えてないんですか？」

苛立ちぎみに訊ねるレイザートに、レティは素直に頷く。

「何のことですか？」

「まあ実際、顔合わせの前でしたけれども。肖像画くらいは、ご覧いただけているものと思っていたのですが」

「肖像画？」

「七年前、貴女が家を出る直前に求婚した者の一人ですよ、レティ」  
言われて、思い出した。

「……ああ。レイザート、思い出した。今とは印象が全然違うから、重なりませんでしたよ」

七年前のレイザートは、実直を絵に描いたような男性と聞いていた。文武両道、美男、真面目というステータスが全て揃った人間だったはずだから、今のレイザートとは正反対ととっても良い。美男は同じだが、不真面目なのは火を見るより明らか。文武両道はもしかしら今でもそうなのかもしれないが、少なくとも噂で聞くことはなかった。それ以上に、女癖の悪さで霞んでしまっているだけなのかもしれないが。

「確かに評判は変わりましたが。顔と名前は変わっていないと思っっていましたかね」

「そうですが、あまりに印象が違いすぎるので。言い訳ではないですが、別人とんでも仕方のない変わり方ですよ」

「私はすぐに分かりましたよ。ファリカ嬢から貴女の事を聞いて」「それは光栄ですね」

どうでも良いというように答えるレイティに、レイザートはため息をつく。

「レイティ。貴女は今、自分の立場を良くご存知でないようですね」「……どういう意味でしょう？」

「私に対して随分とぞんざい過ぎる。ここには私と貴女だけしか居ないので。その気になれば、私は貴女をどうすることも出来る」

「ぞんざいに扱ったつもりはないのですが。気に障ったのなら謝りましょう」

上辺だけの謝罪に、レイザートは眉をひそめる。レイティは何も分からず、悪いとも思わずにただ謝罪の口上を述べているだけに過ぎない。

「許せませんね、レイティ。そのような言葉だけでは。悪いと思うのなら、態度で示していただきたい」

「……そうおっしゃられても。具体的に何を」

「では、私と婚約を」

「は？」

「七年前、私は求婚直後、貴女に家を出られました。貴女は覚えていらっしやらないかと思いますが、貴女に直接お会いする前日ですね。そのとき私がどれほど深く傷付いたか。お会いする前から、自分の存在を否定されたかのようにでした」

「別に、シユラルフィン伯が気に入らなかつたから家を出たわけではないのですが」

「いつまでその名でお呼びになるつもりですか」

「え？」

「貴女は、手紙のやり取りではレイザート、とお呼びでしたよ」

「……」

レティは言葉に詰まった。レティ自身が手紙を書いた覚えはない。書いたとしたら、簡単な挨拶から始まって、前回の手紙へのお礼を述べる、なんともそつけないもののみはずだ。簡単に言えば、「ご機嫌麗しく、先日はお手紙ありがとうございました。あなたのご健康を遠くよりお祈りしています」といった内容だ。簡単に言わずとも、本当にこの程度しか書いていない。こうして遠巻きに見合いを断ってきたのだ。その中で、名前を呼んだという事は無くはないだろうが、さほど多くは無いはずだった。少なくとも相手に気にされるほどには「手紙の中の貴女は、情熱的に私を求めてくださった」

「姉ですね」

それで、ようやく納得がいく。情熱的な内容だというのなら、確実にレティは書いていない。どういつつもりか知らないが、姉が代筆していたのだろう。

「は？」

「あなたと手紙のやり取りをしていたのは、姉です。私は手紙を書いた覚えは無いので。そもそも、大して良くしたわけでもないのに、随分と続くなと思っていたのですよ。あなたほどの人柄と才能と立場なら、私に拘らずとも引く手数多だろうと」

「……」

「ああ、残念ながら姉はもう既に嫁いでおりますので、ご紹介することは出来ませんが。大変失礼なことをいたしました。姉に代わって謝罪いたします」

あまりにもな新事実にも、レイザートは呆然とする。そして、こんな時に心のこもった謝罪をされて、レイザートの怒りは頂点に達した。

「冗談じゃない！ どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むのか！」

「お怒りはごもつともです」

「一体どういつつもりだ！ 私があの時どれだけ傷ついたか！」

姉はきつと暇つぶしだったのだらう……とレティは思うが、ここで口にするほど愚かではない。レイザートがどれだけ傷ついたかは、その後の女癖の悪さから想像が付いた。

ああ、姉さん。罪な女……などと、思っている場合ではなく。

「ええ、言い訳の仕様もない。私から姉に話をつけますので、ミーフオルンからお詫びをさせていただくということ……」

「全くだ！ これは結婚していただかないことには納得できません！」

「……え。誰と、ですか？」

「レティ！」

「はい！？」

レイザートはレティの左手を掴んで引き寄せると、その薬指に指輪をはめた。

「これで婚約成立です。貴女の意見は聞きませんよ」

「っ、え、な、えええ？」

言葉にならない言葉で反論を試みようとして、失敗する。あまりの急展開にレティは言葉を失った。

「では、色々と準備がありますのでこれで失礼させていただきます、レティ。御機嫌よう」

「ご機嫌よ……じゃない、待ってくださいシユラルフィン伯！」

「レイザート、です」

「レイザー……違う、そうではなくてですね、どうしてこういう結果になるんですか」

「どうして？ 私は詐欺をされたのですよ。仮にも伯爵家の長男がたとえ相手が公爵家であろうとも、慰謝料を請求するのにもっともな理由です」

「ええ、ですからミーフォルン家からお詫びの品を……」

「その品に、私は貴女を要求します」

「……私は既にミーフォルンを出た人間です」

「構いません。それに、当時は貴女もミーフォルンの人間だ。無関係とはいえない」

レティはうつと呻いた。確かにレティのいい加減さが招いたと言えなくもない。そして、ミーフォルンはレティを要求されれば喜んで差し出すだろう。嫁き遅れのレティを差し出すことは、痛くも痒くもないどころか逆に都合がいい。

「確かにミーフォルンは私を差し出すことに賛成はするでしょう。しかし、私はミーフォルンを捨てた身です。ミーフォルンからの援助も、ミーフォルンの家督も期待できませんよ」

「構いません。私は私の失ったものを取り戻したいだけなのです。あの時貴女が原因で傷ついたので、もう一度結婚からやり直していただくのです」

「……そのような決め方は、後々、後悔すると思いますが」

「後悔しない結婚などありはしないものです。そのようなくだらないことは、気にしなくて宜しい。どちらにせよ、私は決めたことを翻す気はありません。貴女がここで指輪を付き返すことは出来ませんが、後でミーフォルンから要請があるでしょう。意味のないことです」

「っ……」

退路を絶たれた。レティは何も言い返すことが出来ず、唇を噛んだ。その様子にレイザーは息をつき、悲しげな口調で口を開いた。「それでも、貴女は私との結婚を拒みますか？ 私に一片の同情も

なく、嫌悪しか抱かないと」

「そういうわけでは、ないのですが」

同情と言ふにはおこがましいが、レティとて責任は感じている。レイザートに対しても、のぼせ上がるほどではないにせよ、嫌悪していると言つほどでもない。むしろ、レイザートの能力自体は高く評価していた。

「ではレティ。私に少しでも同情してくださるのなら、結婚を承諾してください」

「……」

レティは眉を寄せてレイザートを睨みつけた。

レイザートの主張は正当であり、責任を感じないわけでもない。だが、だからといって、承諾するには抵抗がある。レティはレイザートに恋焦がれているわけではないし、人生を共に歩みたいという感情を抱いているわけでもない。加えて言えば、治めるべき領地があるわけでもなく、跡継ぎを生む必要があるわけでもない。仕方ないと諦めるにも、責任と納得するにも、材料としては薄弱だった。

「レティ」

黙りこくるレティに焦れたように、レイザートは返事を促した。いや、圧力を掛けたと言う方が適切か。最初から拒否など許されていないのだから。

「……はい」

搾り出すように、レティは答えた。明らかに不本意な表情だが、レイザートは満面の笑みでその言葉を受け入れた。

「ありがとうございます。では、今度こそ私はこれで失礼させていただきます」

「ええ。御機嫌よう、レイザート」

レイザートは一瞬目を見開いてレティを見つめるが、すぐに微笑を浮かべた。

「御機嫌よう、レティ」

流れるように決まった結婚に呆然としながら、レティはレイザー

トの後姿を見詰めていた。しかし、数歩歩いたところでレイザートはくるりと身を翻し、戻ってくる。レティの目の前に立つと、耳元で囁いた。

「レティ、愛していますよ。手紙の件は驚きましたが　今の貴女を、愛しているのです」

そう言つと、今度こそレイザートは部屋を出て行った。言い逃げのような告白に、レティはただ呆然と立ち尽くした。

## (後書き)

ここまでお読み頂き、ありがとうございました。

携帯でお読みいただいている方向けに、拍手お礼を設置しました。ご興味のある方は、拍手ログページへお進みください。なお、リンクが表示されていない場合は、お手数ですが下記のurlをコピーして飛んでください。

<http://nk.syosetu.com/n64888q/>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2591o/>

---

過去の清算はきちんと済ませましょう

2011年5月21日12時10分発行